

障害者の「有能さ」と「温かさ」に関するステレオタイプ

—顕在指標と潜在指標を用いた実験的検証—

柳田 航 (名古屋大学 大学院情報学研究科, yanagida.wataru.758info@gmail.com)

唐沢 穰 (名古屋大学 大学院情報学研究科, mkarasawa@nagoya-u.jp)

村田 光二 (成城大学 社会イノベーション学部, kmurata@seiyo.ac.jp)

Stereotypes about “competence” and “warmth” against people with disabilities:

An experimental study using explicit and implicit measures

Wataru Yanagida (Graduate School of Informatics, Nagoya University, Japan)

Minoru Karasawa (Graduate School of Informatics, Nagoya University, Japan)

Koji Murata (Faculty of Social Innovation, Seijo University, Japan)

Abstract

Studies on stereotypes about people with disability, using measures of explicit judgments, have consistently demonstrated a compensatory pattern of “low in competence but high in warmth” trait ascriptions. On the other hand, results based on implicit measures generally indicate an association with both incompetence and coldness. However, evidence concerning implicit judgment remains to be relatively mixed. The present study tested the possibility that the inconsistency can be mainly attributed to the effects of extraneous variables due to the variability in idiosyncratic aspects of stimulus materials across the studies. On the basis of careful pilot testing, we developed an Implicit Association Test (IAT) consisting of stimulus materials that were ascertained to be equivalent in the strength of association with competence and warmth. Across Studies 1 and 2, our results consistently showed that people with disability were judged implicitly as low both in competence and warmth relative to those without disability, whereas replicating the compensatory judgments on the explicit measure. Implications of the discrepancy between explicit and implicit stereotypes concerning warmth versus coldness are discussed.

Key words

disability, stereotype, implicit association test, contact, prejudice

1. 序論

近年の法整備や、それに基づく施設の改良、そして啓発活動などによって、障害者に対する偏見が低減される傾向にあるように見える。実際、障害者に対する健常者の態度はポジティブであることが示される場合もある(例えば河内, 2001; 栗田・楠見, 2010)。しかし、そこで観察される「態度」の表明は、社会的望ましさによるものに過ぎず、潜在レベルでは「隠された偏見」がいまだに残存している可能性が指摘されている(Hein, Grumm & Fingerle, 2011; Kurita & Kusumi, 2009; Pruett & Chan, 2006)。この潜在レベルの偏見は、無意識的な回避行動として表れるなどして、健常者と障害者の溝を深める一要となることが考えられる(McConnell & Leibold, 2001)。そのため、障害者に対する潜在的な態度を解明していくことは、依然として、現代の障害者問題を読み解く上で必要不可欠な課題である(栗田・楠見, 2014)。

一般に、質問紙尺度などの顕在指標を用いて態度を測定する際には、社会的望ましさの影響が回答にバイアスをもたらす可能性がある、繰り返し指摘されている(Banaji, Nosek, & Greenwald, 2004; Greenwald & Banaji, 1995)。そして、態度の中でも特に偏見やステレオタイプについては、社会的望ましさの存在が明白であるため、

その影響を排除した潜在指標を用いることの重要性が、強調されてきた(Payne & Gawronski, 2010; 栗田・楠見, 2014)。潜在指標の多くは連合ネットワークモデル(Collins & Loftus, 1975)の観点に基づいて開発されており、語彙判断課題や潜在的連合テスト(Implicit Association Test; 略称IAT)などが、代表的な例としてあげられる(Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998; Wittenbrink, Judd, & Park, 1997)。これらの潜在指標を用いることによって得られた態度の傾向は、質問紙尺度のような顕在指標で得られる傾向から乖離することが、確認されている(Hein et al., 2011; Pruett & Chan, 2006)。こうした乖離は特に、障害者のように社会的地位の低い集団や個人が対象である時に、顕著に見られる。なぜなら、概して低い地位におかれているために、潜在的にはネガティブな評価が下されることが予測される一方、社会的望ましさのためにネガティブな反応が抑制され、顕在的にはポジティブな評価が下される傾向が現れるためである(Hein et al., 2011; Pruett & Chan, 2006)。

ただし、集団やその成員である個人に対する印象の形成や評価は、単一的ではなく複数の次元においてなされることが多い。そのため、社会的望ましさの影響を比較的受けやすい次元と、受けにくい次元とがある可能性が考えられる。言い換えると、上述の顕在的態度と潜在的態度との間の乖離が現れやすい場合と、そうでない場合があり得る。以下では、異なる対人評価次元間での、乖

離の現れやすさの差異について議論する。

1.1 障害者に対する評価次元としての有能さと温かさ

人が他者の特性について行う認知は一般に、「能力」と「温かさ」の2次元に沿って行われやすいことが、多くの研究によって示されている (Judd, James-Hawkins, Yzerbyt, & Kashima, 2005; Kervyn, Yzerbyt, Judd, & Nunes, 2009)。個人に関する認知だけでなく、社会集団やカテゴリーに対する偏見やステレオタイプについても、この2次元が主要な構成要素であることが明らかになっている (Fiske, Cuddy, & Glick, 2007; Fiske, Cuddy, Glick, & Xu, 2002)。そして、障害者をはじめ、社会的に「弱者」と位置づけることのできる集団 (例えば「高齢者」「女性」など) に対しては、しばしば、能力において低い評価を下す一方、温かさについては高い評価を与えるという、補償的な態度表明が行われやすいことが知られている (Kay & Jost, 2003)。これは言い換えると、低地位集団への態度表明に与える社会的望ましさの影響が、能力に関するよりも、温かさに関して、より発揮されやすいことを示唆している。

ただし、こうした補償的關係は、社会的望ましさ比較的の影響を与えやすい顕在指標では現れるかもしれないが、潜在指標においても同様の結果が得られるとは限らない。実際、障害者に対する認知を題材に採った従来の研究の中には、能力と温かさの両次元において、ともにネガティブな潜在的態度を見出したものがある。例えば Rohmer & Louvet (2012) は、障害者または健常者を意味するピクトグラムを呈示し、各カテゴリーに関する表象の活性化の程度を、語彙決定課題を用いて測定した。結果は、障害者に関する表象が健常者と比べて、より「冷たさ」の特性と連合しやすく、「温かさ」とは連合しにくいことを示した。また Clément-Guillotin et al. (2018) の研究では、障害者または健常者を意味するピクトグラムが、冷たさ、または温かさを意味する単語の、どちらにより連合しやすいかを、IAT (Implicit Association Test)⁽¹⁾を用いて測定した。結果は、Rohmer & Louvet (2012) の傾向と同様に、障害者ピクトグラムが健常者ピクトグラムよりも、より冷たさと連合し、温かさとは連合しにくいことを示した。これらの結果はいずれも、温かさ次元における障害者への潜在的態度が、顕在的態度ほどにはポジティブでないことを示している。すなわち、顕在的態度における温かさ次元でのポジティブな方向性が、能力の低さに関する判断を補償するものに過ぎない可能性を裏づけている。

一方、顕在指標だけでなく潜在指標においても、温かさの次元で補償性が確認された研究もある。栗田・楠見 (2012) では、障害者と健常者を表象した画像が、冷たさまたは温かさを意味する単語の、どちらにより連合しやすいかを、Clément-Guillotin et al. (2018) と同様に IAT を用いて測定した。結果は Rohmer & Louvet (2012) や Clément-Guillotin et al. (2018) と異なり、健常者画像よりも障害者画像の方が、より温かさ関連の単語と連合しや

すく、冷たさ関連単語とは連合しにくいことを示した。

以上を要約すると、ここで言及した3件の研究の全てにおいて、潜在・顕在いずれの指標でも一貫して、障害者は「能力が低い」という判断が示された。一方、温かさ次元では、顕在的態度に関する限り一貫してポジティブな方向性が見られた。唯一、潜在指標における温かさ判断だけが、研究間で異なる傾向を示した。この差異の原因について、以下に考察する。

1.2 潜在指標の精緻化の必要性

温かさ次元における潜在的態度に関してのみ研究間で差異が見られた原因の1つとして、実験刺激に用いられた題材の違いが挙げられる。すなわち、Rohmer & Louvet (2012) および Clément-Guillotin et al. (2018) は、障害者と健常者を表象する実験刺激として、同一のピクトグラムのセットを用いたが、栗田・楠見 (2012) が参照した Prucett & Chan (2006) で用いられたピクトグラムは、上記とは異なるものであった。用いられた刺激セットが研究間で異なれば、例えば IAT を構成する個々のピクトグラムや、「温かい」「有能な」などの概念語のうち、いずれかに固有な特徴が、アーティファクトとして結果に差異をもたらした可能性が考えられる。例えば、仮に「健常者ピクトグラム」が「障害者ピクトグラム」よりも、あるいは冷たさ関連単語が温かさ関連単語よりも、それぞれ認識性が低かったとしたら、そのため生じた反応時間の違いが、あたかも「障害者は温かい」というバイアスを反映したかのような結果が、見かけ上生じる可能性がある。

そこで本研究では、使用するピクトグラムおよび概念語について、カテゴリー間 (障害者ピクトグラムと健常者ピクトグラム、および温かさ関連語と冷たさ関連語など) で、反応時間のベースラインが等しくなるような刺激の選別を行って、より精緻化された IAT を用いた実験を行った。

1.3 障害者との接触頻度によって潜在的温かさの評価が変化する可能性

温かさ次元の潜在的態度が研究間で異なった原因のうち1つの可能性として、それぞれの実験参加者の障害者に対する接触頻度が影響していたことが考えられる。集団間の接触は、古くから態度改善に最も有効な手段の一つとして考えられており (Allport, 1954)、実際、多くの研究により、障害者と健常者の接触が顕在的態度の改善に効果的であることが明らかにされてきた (例えば Cameron, Turner, Nicolas, & Powell, 2011)。さらに、集団間接触は顕在的態度だけでなく、潜在的態度もポジティブに変化させることが報告されている (レビューとして Lai, Hoffman, & Nosek, 2013)。集団間接触によって潜在的な偏見が改善したことを示す研究は多く報告されているが、その中でも特に対象との接触頻度が、潜在的態度にポジティブな影響を及ぼすと示唆されている (Tam, Hewstone, Harwood, Voci, & Kenworthy, 2006; Turner, Hewstone, & Voci,

2007)。

以上のことから、障害者との接触頻度が、温かさ次元の潜在的態度を改善する可能性も考えられる。もし、栗田・楠見 (2012) の研究への参加者のうち、障害者との接触経験をもつ人が比較的多く、他方 Rohmer & Louvet (2012) や Clément-Guillot et al. (2018) で少なかったとしたら、研究間の潜在的温かさ認知の違いが、参加者の個人差として生じた可能性が考えられる。そのため本研究では、実験参加者の障害者に対する接触頻度が、潜在的温かさの認知にポジティブな影響を与えるかについて、探索的に検証した。

2. 予備実験

予備実験は、IAT で用いる刺激によって異なる結果が生じないように、反応時間のベースラインが等しい実験刺激を選択するために行われた。

大学生・大学院生 19 名 (女性 13 名、 $M_{age} = 22.05$ 歳、 $SD_{age} = 0.91$) を対象にピクトグラムと単語の判別課題をオンライン上で行った。参加者は、コンピューター・ディスプレイの中央に呈示された実験刺激 (ピクトグラムや単語) を、左右上部に呈示されたカテゴリー (例: 障害者-健常者) のいずれかに分類されるように教示された。左側のカテゴリーに当てはまる場合には キーボード上の F キーを、右側のカテゴリーに当てはまる場合には J キーを押して反応するように求められる分類課題であった。参加者は以下で述べる 3 種類の分類課題を行い、それらの提示順は参加者間でランダム化されていた。

分類課題は、障害者または健常者を表すピクトグラムをターゲット刺激とする「障害者-健常者」課題、温かさ関連単語と冷たさ関連単語を分類する「温かさ-冷たさ」課題、能力における高さと低さを分類する「能力」課題の 3 種類であった。ターゲット刺激として、障害者・健常者ピクトグラムが各 10 個、温かさ・冷たさ関連単語が各 15 個、能力高・能力低を表す単語が、各 15 個用意された。また、「障害者-健常者」分類課題では各ピクトグラムが 2 回ずつ呈示されたため、試行数は 40 であった。さらに、「温かい-冷たい」および「能力高い-能力低い」課題でも、各単語が 2 回ずつ呈示され、試行数はそれぞれ 60 試行が実施された。

2.1 結果

栗田・楠見 (2012) のデータ・クレンジングの基準を参考に、エラー率が 30 % 以上だった 1 名を除き、最終的な分析対象者は 18 名とした。ピクトグラムについては、以下の条件を満たすものを本実験で用いる刺激として採用した (ここで①~③の () 内は、条件を満たしている基準として用いた 1 サンプルの t 検定結果を示す)。
① 障害者ピクトグラムの群内で互いに有意な差がないこと ($ts(17) < 1.71, ps > .11$)。
② 健常者ピクトグラムの群内で互いに有意な差がないこと ($ts(17) < 1.94, ps > .10$)。
③ 障害者ピクトグラム・健常者ピクトグラムの群間で平均反応時間に差がないこと ($t(17) = 1.30, p = .21$)。以上の

手続きを経て選別された、計 10 個のピクトグラムを付録に掲げる。次に特性語についても、同様の基準で刺激を採用した。すなわち、温かさと冷たさ単語において、温かさ単語群内 ($ts(17) < 1.75, ps > .10$) および冷たさ単語群内 ($ts(17) < 1.72, ps > .11$) で有意な差がなく、かつ温かさ・冷たさ単語の群間でも差がない ($t(17) = .41, p = .69$)、計 10 単語が選別された。高能力と低能力単語においても同様で、高能力単語群内 ($ts(17) < 1.98, ps > .07$)、低能力単語群内 ($ts(17) < 1.89, ps > .08$)、高・低能力単語の群間でも差がない ($t(17) = 1.45, p = .17$)、計 10 単語が選別された (付録を参照)。

3. 研究 1

研究 1 では、潜在指標において温かさと能力の両次元ともに、障害者に対してよりネガティブな判断が検出される一方 (仮説 1)、顕在指標において、障害者は健常者より能力が低い、より温かいという評価が示される (仮説 2) という仮説を検証した。また、本研究では潜在的態度と顕在的態度を比較することで、障害者への温かさと有能さは両指標で得られる評価の間に、乖離があるのかについても検討した。さらに、潜在指標における温かさの判断が研究間で異なった一因として、接触頻度が影響した可能性について調べた。

3.1 方法

3.1.1 実験参加者

参加者は大学生 41 名 (女性 31 名、 $M_{age} = 19.61$ 歳、 $SD_{age} = 1.43$) であった。参加者に対して、研究への参加・不参加に関わらず不利益を被らないこと、回答データと実験参加者の個人情報をつきつけないこと、回答は中断可能なことを説明した上で、実験参加への同意を求めた。

3.1.2 潜在的ステレオタイプの測定

本研究では、Clément-Guillot et al. (2018) と栗田・楠見 (2012) で使用された IAT (Greenwald et al., 1998) を、Millisecond 社製のソフトウェア Inquisit を用いて作成した。予備実験の手続きと同様、参加者はディスプレイ中央に示されたターゲット刺激 (ピクトグラムまたは単語) が、左右の上部に示されたカテゴリーのいずれかに当てはまるかを、できるだけ早く正確に分類するように求められた。与えられた刺激を、それと一致するカテゴリーに当てはめられれば、次の刺激が呈示された。IAT は以上に記された分類課題を 2 つ行い、それらの差分で潜在的態度を捉える。温かさ-冷たさに関する IAT 課題 (以下「温かさ IAT」と略記) は、「健常者」への反応と温かさ関連語への反応を同一キーで、また「障害者」と冷たさ関連語への反応を同一キーで行う「一致ブロック」と、健常者-冷たさ関連、障害者-温かさ関連の組み合わせで反応を求める「不一致ブロック」で構成されていた。

他方、「能力 IAT」では、障害者-能力低い関連の組み合わせを一致ブロック、健常者-能力高い関連を不一致ブロックと設定した。IAT は 1 ブロックあたり練習試行

20、本試行 40 から成る計 60 試行で構成されているため、1 つの IAT で全 120 試行が行われた。本研究では、障害者に対する潜在的温かさと有能さを調べるために、「人柄が温かい・冷たい」と「障害者」の潜在連合を測定する「温かさ IAT」、「能力が高い・低い」と「障害者」の潜在的連合を測定する「能力 IAT」の 2 種類の IAT が準備された。温かさ IAT と能力 IAT のどちらを先に実施するかは、参加者間でランダム化されていた。

3.1.3 顕在的な有能さと温かさと接触頻度の測定

顕在指標には、Rohmer & Louvet (2012) や栗田・楠見 (2012) を参考に作成した質問紙形式の尺度を用いた。障害者・健常者の各ターゲット集団に、判断次元を表現した計 20 の特性語が、それぞれどの程度当てはまるかについて判断を求めた（「まったく当てはまらない (1) ～とても当てはまる (7)」）。それらの特性語とはすなわち、温かさ（温かい、温和な、穏やか、ぬくもり、愛情のある）、冷たさ（冷ややか、薄情な、冷酷な、冷淡な、不誠実な）、高能力（優秀な、秀逸な、達者な、秀でた、優れた）および低能力（未熟な、劣等な、知性のない、頭の悪い、下手な）と関連する、各 5 語であった。これらの各単語が参加者に呈示された。ここで、障害者ターゲットについては、「身体障害者」に限定した。一方、健常者については、「自分自身と同性の大学生」一般を念頭において評定を求めた。これは、本研究の実験参加者が大学生であったことから、障害者以外の「健常者」として、デフォルト的に最も想起しやすい対象集団と考えたためである。

さらに、障害者との接触頻度を測定するために、「現在、あなたは身体的な障害を持つ人とどれほどの頻度で交流していますか。」および「過去に、あなたは身体的な障害を持つ人とどれほどの頻度で交流していましたか」の質問に対して、それぞれ回答した（「まったく交流していない／したことがない (1) ～「よく交流する／していた (6)」）。

3.2 手続き

大学の授業中に行われた募集に対し参加意思を示した実験参加者は、「身体障害者に対するイメージ調査」と「身体障害者に関する画像や単語の分類課題」の両方に取り組むという説明を受け、参加への同意をした後実験に参加した。研究 1 では、全てオンライン上の手続きに従い実験を実施した。実験参加者はまず、身体障害者に対するイメージ調査におけるいくつかの質問に回答した。ここでは、上記の顕在指標の項目が尋ねられた。次に、身体障害者に関する画像や単語の分類課題と称した温かさ IAT と能力 IAT を遂行した。すべての参加者が、まず顕在指標課題、次に潜在指標課題という順序で遂行した。これは、最初に IAT に取り組むことにより、実験の意図に気づいた状態で顕在指標への回答を行うという可能性を回避するためであった (McConnell & Leibold, 2001)。実験全体でかかった時間は、1 人あたり約 30 分であった。

3.3 結果と考察

Greenwald, Nosek, & Banaji (2003) の方法に倣って、IAT において 300 ms 未満で反応した試行が、全体の 10 % 以上を占めた参加者は分析から排除した。さらに、回答を中断した者と合わせて計 6 名を除いた、35 名を分析対象とした。

IAT における反応の測度としては、 D 得点 (Greenwald et al., 2003) を用いた。 D 得点の算出方法は、以下の手順による。①練習試行における一致ブロックと不一致ブロックの平均反応時間の差分を練習試行全体の標準偏差で除して標準化する。②本試行における一致ブロックと不一致ブロックの差分を本試行全体の標準偏差で除して標準化する。③1 と 2 の平均値を算出する。これは、一致ブロックと不一致ブロックの各平均反応時間における差の効果量 (Cohen の d) に相当する。

本研究の主なターゲット集団は、健常者と比較した際の障害者であるため、「温かさ IAT」で正の D 得点は「障害者」に対する「温かさ」の潜在的判断、負の D 得点は「障害者」に対する「冷たさ」の潜在的判断の強さを表す。「能力 IAT」では、正の得点は「高能力」、負の得点は「低能力」のそれぞれと、障害者との間の潜在的連合強度を表している。

潜在指標と顕在指標を直接比較するという本研究の趣旨に則って、顕在指標である評定値についても同様に、健常者と障害者に対する評定値間の差を標準化した効果量指標 (d ; Cohen, 1977) を求めた。具体的に、まず「温かさ-冷たさ」の次元では、参加者ごとに、温かさ関連 5 語への平均評定値から、冷たさ関連 5 語への平均評定値を減じたものを、さらに健常者・障害者間で差を求めて、これを標準偏差によって標準化した。正の得点は健常者と比較した際の「障害者の温かさ」に関する、負の得点は「障害者の冷たさ」に関する、それぞれ顕在的態度の強さを表す。また、「能力」次元についても、同様の標準化された指標を得た。IAT の D 得点は健常者と身体障害者の差分も含めた効果量となっているため、顕在指標でも同性の大学生と身体障害者の差分を含めた効果量、 d (Cohen, 1977) を求めた。 D 得点と同じく、障害者と温かい・能力が高い評定値が高ければプラスに、障害者と冷たい・能力が低い評定値が高ければマイナス方向になるよう算出した。

3.3.1 障害者の温かさと有能さに関する態度

温かさ IAT と能力 IAT それぞれの D 得点について、0.0 を比較基準とした 1 サンプル t 検定を、潜在指標について行った (図 1 の白色グラフを参照)。温かさ IAT における D 得点 ($M = -0.50$) は有意に負方向であることが示された ($t(34) = -7.82, p < .001$)。すなわち、健常者と比較した際の障害者と、冷たさが連合しやすかった。また、能力 IAT では障害者と能力の低さが連合しやすい傾向にあった ($D: M = -0.97; t(34) = -18.32, p < .001$)。全体として、身体障害者は潜在的に「健常者よりも冷たく、能力も低い」と判断されていることが分かり、仮説 1 が支持され

た。これらの結果は Rohmer & Louvet (2012) や Clément-Guillot et al. (2018) と同様の傾向であった

一方、顕在的態度についても、0.0 を比較基準とした 1 サンプル t 検定を、温かさと能力の効果量に対して行った (図 1 の黒色グラフを参照)。顕在的な温かさにおいて、身体障害者は健常者よりも温かいと評価された ($t(34) = 2.98, p < .01$)。一方、顕在的な能力については、身体障害者と健常者の能力は同等と評価された ($t(34) = -0.28, p = .78$)。全体として、身体障害者は顕在的に「健常者よりも温かく、能力については同等」と判断されており、仮説 2 の一部が支持される結果となった。温かさにおける評価は栗田・楠見 (2012) や Rohmer & Louvet (2012) と同様の傾向であった。しかし、能力における評価は、身体障害者と健常者の能力は同等という点で先行研究と異なる傾向が示されたが、これは社会的望ましさの影響が強く生じた可能性が高いと解釈できる。

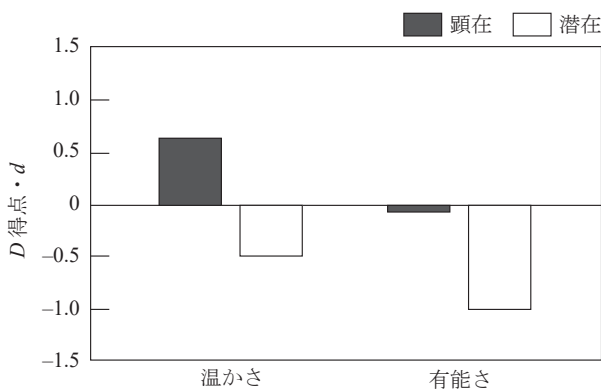


図 1: 障害者 (vs. 健常者) に対する潜在的・顕在的態度 (D 得点 (潜在指標) と効果量 (顕在指標) が用いられている)

注: プラス方向は、健常者と比べ障害者の方がより温かく有能であること、マイナス方向は、健常者と比較して障害者の方がより冷たく無能力であることを示す。0 は、健常者と障害者に対する評価は同等であることを表す。

3.3.2 潜在指標と顕在指標の比較

潜在指標と顕在指標を直接比較するために、温かさとおよび有能さのそれぞれについて、 D 得点と効果量を比較する t 検定を行った。温かさ次元では、顕在的に身体障害者をより温かく評価する一方で、潜在的には身体障害者をより冷たく評価される傾向が確認され、潜在指標と顕在指標との乖離が見られた ($t(34) = -5.68, p < .001$)。有能さ次元では、顕在的態度よりも潜在的態度の方が、障害者に対して能力をより低く評価された ($t(34) = -4.63, p < .001$)。これは、顕在指標よりも潜在指標の方がネガティブな態度を顕著に表しやすいということを意味している。

3.3.3 潜在的温かさと接触頻度との関連

先行研究間での結果の相違を、サンプル間での、障害者との接触頻度の違いによって説明することができるかを検証した。潜在的温かさの D 得点を従属変数に、そして現在と過去の接触頻度の合算値 ($M = 5.31, SD = 2.84$) を独立変数とする、単回帰分析を行った。その結果、予

測変数の寄与は有意ではなかった ($\beta = .18, t(33) = 1.04, p = .31$)。つまり、障害者との接触頻度が高くても、その特性を温かいと潜在的に判断しているわけではないことが示された。この結果は、先行研究の中で栗田・楠見 (2012) だけが、「障害者—温かい」という潜在レベルでの連合を報告したのが、障害者との接触経験がこの研究のサンプルにおいて特異的に高かったためという可能性を排除するものであった。

4. 研究 2

研究 1 はオンライン実験であったため、実験環境や使用機器の違いなどの問題点が指摘できる。そこで研究 2 では、より厳密な統制化での実施を目的に、実験室実験を行なった。使用した実験刺激など、実験パラダイムの主要部分は研究 1 と同一であった。

研究 2 は、実験環境や使用機器を統制した厳密な環境で追試しても、研究 1 と同様の結果が得られるかを明らかにすることを目的に実施された。

4.1 方法

4.1.1 実験参加者

実験参加者は大学生 58 名 (女性 33 名、 M age = 19.84 歳、 SD age = 1.68) であった。研究 1 と同様に参加者は、研究への参加・不参加に関わらず不利益を被らないこと、回答データと参加者の個人情報とを結びつけないこと、回答は中断することも可能なことを説明した上で、実験参加への同意を行った。

4.1.2 測定と手続き

研究 2 で用いた潜在指標のピクトグラムと単語、および顕在指標の質問項目は全て、研究 1 と同一のものであった。

大学の実験参加者募集サイトで集められた実験参加者は、「障害者のイメージに関する研究」への協力として、「単語と画像の分類課題」といくつかの質問に回答すること、および謝礼は Amazon ギフト券 500 円であることが説明されたのち、参加に同意した。案内された実験室で着席した実験参加者の目の前には、ノートパソコン (Dell Vostro 15-3572) が置かれており、実験は全てそのノートパソコンで行われた。まず、実験参加者は潜在指標か顕在指標のどちらかを先に取り組んだ。潜在指標と顕在指標の内容は研究 1 と同様であったが、ここでは潜在指標と顕在指標の提示順がランダム化されていた。

4.2 結果と考察

Greenwald et al. (2003) に従ってデータ・クレンジングを行ったが、排除対象者はいなかった。また、回答を中断した者やアテンション・チェック⁽²⁾により排除された者もおらず、実験参加者 58 名全員を分析対象とした。 D 得点と顕在指標の効果量は、研究 1 と全く同様の手順で算出された。

4.2.1 潜在的な有能さと温かさ

研究1と同様に、温かさ IAT と能力 IAT の D 得点に対して 0.0 を中点とした 1 サンプル t 検定を行った (図2の白色グラフを参照)。その結果、身体障害者は健常者よりも、冷たさと連合しやすく ($t(57) = -12.98, p < .001$)、また能力の低さとも連合しやすいことが示された ($t(57) = -22.38, p < .001$)。つまり研究2でも研究1と同様の結果が再現された。

一方、顕在指標で得られた温かさと能力の効果量に対して、0.0 を比較基準とした 1 サンプル t 検定を行った (図2の黒色グラフを参照)。まず温かさでは、効果量が 0.0 と有意に異ならず、身体障害者と健常者の温かさ評価が同等であったことが明らかになった ($t(57) = 1.09, p = .28$)。能力では、身体障害者の方が有意に低く評価された ($t(57) = -5.80, p < .001$)。このように研究2では、健常者 (同性の大学生) に対する温かさと有能さの評価が高いという、研究1とは異なる結果が得られた。

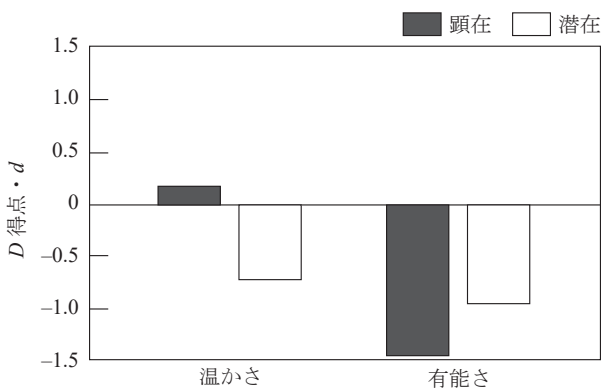


図2: 障害者 (vs. 健常者) に対する顕在的・潜在的態度 (温かさと有能さは D 得点と効果量で表されている)

注: プラス方向は、健常者と比べ障害者の方がより温かく有能であること、マイナス方向は、健常者と比較して障害者の方がより冷たく無能力であることを示す。0 は、健常者と障害者に対する評価は同等であることを表す。

4.2.2 潜在指標と顕在指標の比較

研究1と同様に、潜在指標と顕在指標を直接比較するために、温かさと有能さのそれぞれについて、 D 得点と効果量を比較する t 検定を行った。温かさ次元では、顕在的に身体障害者をより温かく評価する一方で、潜在的には身体障害者をより冷たく評価される結果が得られた ($t(57) = -5.35, p < .001$)。これは研究1と同様の結果で、顕在指標ではポジティブな評価をする一方で、潜在指標ではネガティブな評価が下されるという、顕在指標と潜在指標の間で乖離が見られた。有能さ次元においては、身体障害者に対する潜在的態度と顕在的態度は、同程度に能力が低いと示すことが確認された ($t(57) = 1.97, p = .053$)。研究2では、健常者に対する有能さの顕在的な評価が高いという点で、研究1と異なる結果が得られた。研究1と研究2の間で、健常者 (同性の大学生) に対する有能さの顕在的な評価差が生じた理由として、同性の大学生として想起された対象の特性が異なっていた可能

性がある。研究1では、能力が高くない同性の大学生を想起した実験参加者が多かった一方で、研究2では能力が高い同性の大学生を想起した実験参加者が多かったためであると考えられる。

4.2.3 潜在的温かさと接触頻度との関連

研究1と同様に接触頻度が、潜在的な温かさの認知に影響する可能性を検討した。現在と過去の接触頻度の合算値 ($M = 6.55, SD = 2.48$) を独立変数に、潜在的温かさの D 得点を従属変数とする、単回帰分析を行った。その結果、研究1と同様に、障害者との接触頻度が温かいという潜在的評価に影響するわけではないことが示された ($\beta = -.10, t(58) = -.72, p = .48$)。

5. 総合考察

研究1および研究2を通して、身体障害者に対する顕在的な評価は温かいとされる一方で、潜在的には冷たさと連合されやすいことが示された。これらの傾向は、本稿の導入部分で取り上げた先行研究の内、Rohmer & Louvet (2012) および Clément-Guillot et al. (2018) と一致する。すなわち、本研究では、日本でもこれら2つの研究と同様の結果が得られるということが分かった。一方、同じような研究の中で、栗田・楠見 (2012) だけが、身体障害者に対する潜在的評価は温かいとされる、という結果を示している。この差異の原因を以下で考察する。本研究では、年齢や性別など障害者以外の要素を排除することができるピクトグラムを実験刺激として用いた。しかし、栗田・楠見 (2012) では障害者画像として、高齢の女性が、車いすに乗る姿や、健常者と談笑している姿を写した写真を使用していた。³⁾ また、一般に女性と温かさが潜在レベルですら連合しやすいことが確認されている (Ebert, Steffens, & Kroth, 2014)。以上のことから栗田・楠見 (2012) で使用された障害者画像が、特に温かさとの連合を生じやすかった可能性が考えられる。さらに、栗田・楠見 (2012) の結果が、障害者との接触経験の頻度によるものである可能性についても検証したが、潜在的態度と接触頻度の間には関係がないことが、研究1・2で一貫して示された。

本研究では一貫して、身体障害者は潜在的に「能力も低く、冷たい」という判断が行われることが明らかになった。これらの認知が積極的の害に繋がるとされていることを考慮すると (Cuddy, Fiske, & Glick, 2007)、本研究の結果は、身体障害者が危害対象となる可能性について、その源泉のひとつを示唆していると言える。日本社会において、障害者は保護の対象とされながら、親族や施設職員による虐待行為は様々な形で依然行われているという報告がある (厚生労働省, 2021)。もし障害者が、危害の対象となる潜在的可能性のもとに置かれているのであれば、それが虐待行為の原因のひとつであるという解釈が可能かもしれない。この点について、今後の研究でさらに実証的検証を加えることが重要である。

謝辞

本研究に対して科研費 18H01078 および 19H00518 の助成を受けた。

注

- ⁽¹⁾ 測定するターゲットと属性をカテゴリーとして組み合わせ、ターゲットと属性を表象した刺激を分類してもらう判断課題である。
- ⁽²⁾ 質問の中に、「この質問には「1」と回答してください」という項目を用意し、アテンション・チェックとした。
- ⁽³⁾ 楠見, personal communication, 11月6日, 2021年。

引用文献

- Allport, G. W., Clark, K., & Pettigrew, T. (1954). *The nature of prejudice*. Reading, MA: Addison-Wesley.
- Banaji, M. R., Nosek, B. A., & Greenwald, A. G. (2004). No place for nostalgia in science: A response to Arkes and Tetlock. *Psychological Inquiry*, 15, 279-289.
- Cameron, L., Rutland, A., Turner, R., Holman-Nicolas, R., & Powell, C. (2011). ‘Changing attitudes with a little imagination’: Imagined contact effects on young children’s intergroup bias. *Anales de Psicologia/Annals of Psychology*, 27, 708-717.
- Cohen, J. (1977). *Statistical power analysis for the behavioral sciences (Rev. ed.)*. New York: Academic Press.
- Clément-Guillot, C., Rohmer, O., Forestier, C., Guillotin, P., Deshayes, M., & d’Arripe-Longueville, F. (2018). Implicit and explicit stereotype content associated with people with physical disability: Does sport change anything? *Psychology of Sport and Exercise*, 38, 192-201.
- Collins, A. M. & Loftus, E. F. (1975). A spreading-activation theory of semantic processing. *Psychological Review*, 82, 407-428.
- Cuddy, A. J., Fiske, S. T., & Glick, P. (2007). The BIAS map: Behaviors from intergroup affect and stereotypes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 92, 631-648.
- Ebert, I. D., Steffens, M. C., & Kroth, A. (2014). Warm, but maybe not so competent?: Contemporary implicit stereotypes of women and men in Germany. *Sex Roles*, 70, 359-375.
- Fiske, S. T., Cuddy, A. J., Glick, P., & Xu, J. (2002). A model of (often mixed) stereotype content: Competence and warmth respectively follow from perceived status and competition. *Journal of Personality and Social Psychology*, 82, 878-902.
- Fiske, S. T., Cuddy, A. J., & Glick, P. (2007). Universal dimensions of social cognition: Warmth and competence. *Trends in Cognitive Sciences*, 11, 77-83.
- Greenwald, A. G. & Banaji, M. R. (1995). Implicit social cognition: attitudes, self-esteem, and stereotypes. *Psychological Review*, 102, 4-27.
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: the implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1464-1480.
- Greenwald, A. G., Nosek, B. A., & Banaji, M. R. (2003). Understanding and using the implicit association test: I. An improved scoring algorithm. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 197-216.
- Hein, S., Grumm, M., & Fingerle, M. (2011). Is contact with people with disabilities a guarantee for positive implicit and explicit attitudes? *European Journal of Special Needs Education*, 26, 509-522.
- Judd, C. M., James-Hawkins, L., Yzerbyt, V., & Kashima, Y. (2005). Fundamental dimensions of social judgment: understanding the relations between judgments of competence and warmth. *Journal of Personality and Social Psychology*, 89, 899-913.
- 河内清彦 (2001). 視覚障害学生及び聴覚障害学生に対し大学生が想起するイメージの意味構造的性及び専攻学科との関連. *教育心理学研究*, 49, 81-90.
- Kay, A. C. & Jost, J. T. (2003). Complementary justice: Effects of “poor but happy” and “poor but honest” stereotype exemplars on system justification and implicit activation of the justice motive. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 823-837.
- Kervyn, N., Yzerbyt, V. Y., Judd, C. M., & Nunes, A. (2009). A question of compensation: the social life of the fundamental dimensions of social perception. *Journal of Personality and Social Psychology*, 96, 828-842.
- Kurita, T. & Kusumi, T. (2009). Implicit and explicit attitudes toward people with disabilities and effects of the internal and external sources of motivation to moderating prejudice. *Psychologia*, 52, 253-260.
- 栗田季佳・楠見孝 (2010). 「障がい者」表記が身体障害者に対する態度に及ぼす効果—接触経験との関連から—。 *教育心理学研究*, 58, 129-139.
- 栗田季佳・楠見孝 (2012). 障害者に対する両面価値的態度の構造. *特殊教育学研究*, 49, 481-492.
- 栗田季佳・楠見孝 (2014). 障害者に対する潜在的態度の研究動向と展望. *教育心理学研究*, 62, 64-80.
- 厚生労働省 (2021). 令和2年度使用者による障害者虐待の状況等. Retrieved from <https://www.mhlw.go.jp/content/11909000/000821382.pdf>. (閲覧日: 2022年10月29日)
- Lai, C. K., Hoffman, K. M., & Nosek, B. A. (2013). Reducing implicit prejudice. *Social and Personality Psychology Compass*, 7, 315-330.
- McConnell, A. R. & Leibold, J. M. (2001). Relations among the Implicit Association Test, discriminatory behavior, and explicit measures of racial attitudes. *Journal of Experimental Social Psychology*, 37, 435-442.
- Payne, B. K. & Gawronski, B. (2010). A history of implicit social cognition: Where is it coming from? Where is it now? Where is it going. *Handbook of Implicit Social Cognition: Measurement, Theory, and Applications*, 1, 1-15.

- Pruett, S. R. & Chan, F. (2006). The development and psychometric validation of the Disability Attitude Implicit Association Test. *Rehabilitation Psychology*, 51, 202-213.
- Rohmer, O. & Louvet, E. (2012). Implicit measures of the stereotype content associated with disability. *British Journal of Social Psychology*, 51, 732-740.
- Tam, T., Hewstone, M., Harwood, J., Voci, A., & Kenworthy, J. (2006). Intergroup contact and grandparent-grandchild communication: The effects of self-disclosure on implicit and explicit biases against older people. *Group Processes and Intergroup Relations*, 9, 413-429.
- Turner, R. N., Hewstone, M., & Voci, A. (2007). Reducing explicit and implicit outgroup prejudice via direct and extended contact: The mediating role of self-disclosure and intergroup anxiety. *Journal of Personality and Social Psychology*, 93, 369-388.
- Wittenbrink, B., Judd, C. M., & Park, B. (1997). Evidence for racial prejudice at the implicit level and its relationship with questionnaire measures. *Journal of Personality and Social Psychology*, 72, 262-274.

付録

実験刺激 使用した単語とピクトグラム

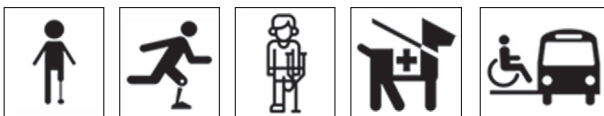
温かさ: 温かい, 寛容な, 思いやり, 親身な, 人なつこい。

冷たさ: 冷たい, 短気, 冷酷な, 冷淡な, 非人情。

高能力: 優秀な, 賢い, 達者な, 上手な, 逸材。

低能力: 未熟な, 無力, 無能, 頭の悪い, 未発達。

障害者ピクトグラム



健常者ピクトグラム



(受稿：2022年10月29日 受理：2022年12月1日)